道標ない旅　考えて行動できる人
～自立･創造･しなやかな心～

令和５年度　第２９号
２０２４．１．３１発行
葉山町立南郷中学校
校長　益田　孝彦
Tel.　046-875-9494
Fax.　046-876-0684
https://www.town.hayama.lg.jp/nangou/index.html

◇◇　第２９号のダイジェスト　今回は、【みんなの学校】大空小学校に係る特集号です。　◇◇

１．映画「みんなの学校」の初代校長先生である　　先生のお話を直接伺うことができる、３月２５日（月）の学校教育シンポジウムに是非ご参加くださいませんか？。葉山町の支援教育や不登校対策等、学校が大きく変わるチャンスだと信じます。一緒に学びましょう。

２．『「ふつうの子」なんて、どこにもいない』という本の一部を紹介します。

・大人が「困っている子」を排除せず、「ふつう」だと受け入れると、そこにいる子どもたちはその空気を体で吸収します。それが社会で生きていくために通用する強い力になる。

・世間の「ふつう」はちょっと違う。どっちが「ふつう」 だと思います?

・学校に入っていくときにね、鉄則があります。 自分の子どもは放っておくこと。自分の子どもではなく、その周りの子どもたちをよく見て、困っていそうな子がいたら声をかける。

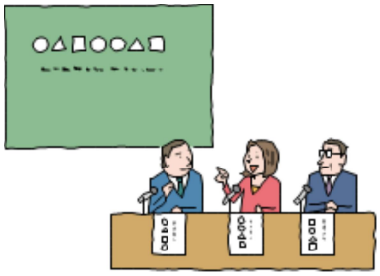
・皆さんはサポーターです。 サポーターのルールは自分の子どもは見ない、話さない、さわらない。サポーターの仕事は、自分の子どもの周りの子どもを育てることです。

◆◆　大空小学校と　　先生ってご存じですか？映画「みんなの学校」の初代校長先生です。　◆◆

とっくにご存じの方、映画「みんなの学校」をご覧になった方もたくさんいらっしゃると思います。実は、私自身は映画も見ていなくて、つい先日まで噂で聞いた程度の知識しか持ち合わせていませんでした。その後本人に直接お目にかかる機会が１月１９日の研修でありました。何も知らずに研修に参加するのは失礼と思い、本屋に立ち寄り、『「ふつうの子」なんて、どこにもいない』という本を購入して読んでみました。

一言、読んでみて得ることが多く、良かったです。そして昼食会を通して、直接お話しできる機会を得たので、伺いたかったことを全部直接お答えいただきました。正直すごいな、筋が通っている方だなと、心から感服いたしました。

端的にざっくり言えば、大空小学校は、支援教育や不登校児を出さない実践で名を馳せた学校です。



やがて皆様のもとに、葉山町教育委員会が作成したチラシが届くと思いますが、今年度の修了式の日となる３月２５日（月）に、葉山町福祉文化会館にて、学校教育シンポジウム「インクルーシブな楽校づくりのために」が開催されます。第１部は１０時から「みんなの学校」の上映。第２部は１３：３５から「みんなの学校」の上映、１０分の休憩を挟んで、１５：３５からはパネルディスカッション「インクルーシブな楽校づくりのために」。パネリストに　　さん、　　町長など４名の方を迎え、　　葉山町教育委員会教育長自らがファシリテーターを務めるディスカッションを行います。

教職員をはじめ、教育に関心のある保護者や地域の方にたくさん集まっていただき、映画を見るとともに、　　さんのお話を直接伺うことが出来れば、町全体の支援教育や不登校対策が格段の質的向上を果たす可能性があると感じています。是非とも誘い合ってご参加ください。なお、会場でご観覧・参加を希望される方は、チラシのＱＲコードを利用して、３月１７日（日）までにお申し込みいただきますように併せてお願い申し上げます。※第３部のパネルディスカッションのみ YouTubeLive 配信を予定しているそうです。

◆◆　大空小学校「みんなの学校」の考え方を少し紹介します。興味湧きませんか？　◆◆
＜「ふつうの子」なんて、どこにもいない　より本文抜粋＞

・大空小学校では、椅子に座れない子がいるのが当たり前、暴れる子がいるのが当たり前、教室を飛び出す子がいるのが当たり前。そのことをみんなが共有しています。怒られてじっとできるものなら、本人もそうしたい。でもいくら怒られたって、じつとすることが苦手な子もたくさんいる。机をガタガタさせる子を、「周りに迷惑をかける困った子」と見るか、「この子はみんなと一緒にいることに不安を感じて困っでいる子」と感じるか。大人が「困っている子」を排除せず、「ふつう」だと受け入れると、そこにいる子どもたちはその空気を体で吸収します。そんな子どもたちは、「自分が勉強できない理由が、 この子が机をガタガタさせるせいだとなったら、よけいにこの子は困るよな」と考えて、うるさい音を邪魔に感じない学び方を身につけます。それが社会で生きていくために通用する強い力になる。**p18**

・一年生の教室の横の廊下を通ると、やたらと子どもとぶつかるんです。「おおっ！ 交通事故やんか」 なんてことがしょっちゅうで、いつも誰かが教室から飛び出してくる。子どもたちは、教室でじっとしていることがしんどいから飛び出します。大空小学校にはいろんな人が見学に来ますが、その様子を見て「ああ、学級崩壊ですか」とさらっと言葉に出す人もいます。 「学級崩壊」 ってメディアでもよく使われますよね。私が「学級崩壊という言葉を使わず説明してください」と返すと、 「みんなが教室の椅子に座っていないじゃないか」。子どもが椅子に座っていない状況=学級崩壊という価値観を持っている大人がいるわけです。面白いことに、二年生の教室の前に行くとぶつかる率が非常に下がる。三、四年生のフロアに行くとほとんどない。 五、六年生のフロアなんて「え、別世界?」って感じですよ。 これって、子どもの当たり前の発達です。でも世間の「ふつう」はちょっと違う。
　一年生ってまだ体が小さいから、大人が力で押さえつけられる「弱者」です。 大きな体の先生が怖いから、小さな一年生はビシッと座っている。 二年生になると、意思がはっきりしてくるので、学校に来られない子が増える。三、四年生になると、大きな声も出せて動き回って教室が荒れる。 五、六年生になったら、もう先生の言うことなんかきかずに横を向いている。　どっちが「ふつう」 だと思います?　**p78**

・スイッチを変える。 大人の自分が、「周りの子どもから学びたい。そのためにできることをやりたい」って。校長も、先生たちも、みんな同じ学びの仲間であり、親の味方です。たとえば、大人のボランティアとしてどんどん学校に入っていけばいい。「学校に入ってもらっては困ります」という学校は、まだ少なくありません。 でもね、そんなの時代錯誤も甚だしいですよ。ただ、学校に入っていくときにね、鉄則があります。 自分の子どもは放っておくこと。自分の子どもではなく、その周りの子どもたちをよく見て、困っていそうな子がいたら横にいって「なんかやることある?」って声をかける。最初は挫折を感じることもあると思います。もし、自分の子どもをいじめている子がいたら、そのいじめている子が不幸なわけだから、「その子に自分はなにができるかな」と、一人の大人として考える。この「困っている子になにができるのか」という部分でブレないことがとても大切です。だんだんと自分の中にブレない芯のようなものができてきます。「あ、ブレない自分がいるな」って気づいたら、めっちゃ楽しくなりますよ。これが学び。学びはほんとうに楽しい。**p100**

・学校には、自分の子がいますよね。自分の子どもを育てたかったら、自分の子どもの「周りの子ども」を育てましょう。これを合言葉のように伝えます。（中略）皆さんはサポーターです。 サポーターのルールは自分の子どもは見ない、話さない、さわらない。（中略）学校には、いっぱい子どもがいます。だから時間があれば、学校に来て出会ってほしい。すべての教室を開いています。だから気にせずにどんどん教室に入って、困っている子のそばにそっといてください、と。サポーターの仕事は、自分の子どもの周りの子どもを育てることです。**p113**

　紹介しきれないのが残念なほど、まだまだ勉強になるお話しがいっぱい書かれているのですよ！……